

## 「ねずみの嫁入り」 シナリオ

登場者:9名、作:千々松 健

＜ナレーター

「むかしむかし、その昔、あるところに米倉がありました。こぼれたお米を食べて、ねずみたちは豊かに暮らしておりました。そこにチュー子というねずみがありました。年ごろなのですが、はたして嫁入りはうまくいくのでしょうか？」

＜チュー子

「ねずみのチュー子です。私そろそろ結婚したいんです。でも、どうしたらいいんでしょう？。。。そうだ、お父さんとお母さんに相談してみよう。」

＜お父さんねずみ

「そうだな、チュー子もそろそろ年ごろになったので、よいお婿さんを探さないといけないね」

＜お母さんねずみ

「だったら、世界で一番えらい方を婿に取ることにしなさい。私たちも応援するから」

＜ナレーター

「そこで、チュー子は考えました。世界で一番えらい方は誰だろう？ いろいろ考えた末に。。。やはりお日様が一番えらいのではないかと思い当たりました。そこで、チュー子は、次の日、お日様に会いに行きました。」

＜チュー子

「お日様は世界で一番えらい方だと思いますので、どうかわたしのお婿さんになってくださいませんか？」

＜お日様

「わたしが世界で一番えらいというのですね、ウーン、確かにそうかもしれない。しかし、雲さんが出てきたら日は陰ってしまうからから、雲さんの方がえらいと思うよ。」

＜ナレーター

「そういわれると確かにそうかも知れない。チュー子は気を取り直して今度は雲さんに会いに行きました。」

＜チュー子

「雲さんは世界で一番えらい方だと思いますので、わたしのお婿さんになってくださいませんか？」

＜雲さん

「確かにそうかも知れないけれど、風が出てきたら吹き飛ばされてしまうから、風さんの方がえらいと思うよ。」

<ナレーター>

「そういわれると確かにそうかも知れない。チュー子は気を取り直して今度は風さんに会いに行きました。」

<チュー子>

「風さんは世界で一番えらい方だと思いますので、わたしのお婿さんになってくださいませんか？」

<風さん>

「確かにそうかもしれないけれど、壁があったら風は止められてしまうから、壁さんの方がえらいと思うよ。」

<ナレーター>

「こうして、チュー子の結婚相手探しは、まさに壁にぶつかってしまうのです。しかし、チュー子はあきらめません。米倉の壁に聞きに行くことにしました。」

<チュー子>

「壁さんは世界で一番えらい方だと思いますので、わたしのお婿さんになってくださいませんか？」

<壁さん>

「世界で一番えらい方と言われると確かにそうかもしれないけれど、毎晩わたしの足元をかじって穴をあけてしまうネズミがいる。チュー太郎という名前らしい、彼の方が偉いと思うよ。」

<チュー太郎>

「誰か僕のことを呼んだかい。」

<チュー子>

「エー、そのチュー太郎って、私の幼なじみなんです。」

<ナレーター>

「ねずみのチュー子はその時、はっと気がついたのです。世界のナンバーワンではなく、オンリーワンが大切なことに。そして、自分にとってかけがえのないチュー太郎をお婿さんにしようと決心するのです。」

<お父さん、お母さんねずみ>

「チュー太郎君、どうかうちの娘のチュー子のお婿さんになってください。」

<ナレーター>

「こうしてチュー子とチュー太郎は、はにかみながら『チュー』をして結婚にゴールインしたという、めでたしめでたしのお話です。これでおしまい。」

<完>